

## 「神は愚かにして・・・」

### ヨハネによる福音書 1章1～18節 (2)

いまだにロングセラーになっているようですが、20年ほど前、『大河の一滴』という本が話題になりました。五木寛之<sup>いつきひろゆき</sup>さんの本で、何週間か、全国で売り上げナンバーワンを記録しました。その折、新聞に載った 著者のインタビュー記事の一節です。

「阪神大震災で、『モノ』が頼りにならないことが明らかになり、オウム事件では、『心』も怖いことが分かった。何も『よりどころ』にできない厳しい時代。自殺者の激増は、社会全体の悲鳴なんだと思う」

戦後五十年間、突っ走ってきたひずみが一気に噴出する日本社会の惨状に「もう覚悟するしかない」と、一種の人生論<sup>じょうし</sup>を上梓した。

生きる「よりどころ」を探して、現代人は、哲学書や人生論を次々と買い求める。プラス思考を説く『脳内革命』などがミリオンセラーになった。「しかし、安易なプラス思考で解決できないくらい深刻な問題はいくらでもある。ここは覚悟を決めて、究極のマイナス思考から始めるしかない」

さらに、本のキャッチコピーには こんなふうにも書かれていました。

「私はこれまで二度、自殺を考えたことがある」

人生とは苦しみと絶望の連続だ。

地獄は今ここにある。

時代の閉塞感を感じさせる、息の詰まるような重苦しい言葉です。何もかもが<sup>ゆ</sup>行きづまり、出口の見えない日常。どこに光があるのか、どこに救いがあるのか。たしかに、そう叫びたくもなる現実があります。事は、20年経った今も さほど変わらないのかもしれませんが。人生は、容易に割り切れない矛盾や落胆で満ちています。誰かが言っていました。「永遠の命？ 冗談じゃないわよ。こんな毎日が永遠に続くなんて、地獄よ」。そんな繰り返しのなか、あれやこれやに行きづまり、ついには自分自身にも行きづまって、喘<sup>あえ</sup>ぎながら生きている今日のこの時。そうした葛藤は、人生に真剣に向かう人ほど、重く、大きく伸<sup>の</sup>しかかってくることでしょう。真剣に向かえば向かうほど、その偽らざる現実<sup>つが</sup>に気づかされるからです。

私たちには はたして、こうした現実<sup>つが</sup>に潰されることなくいさせてくれる、そんな確かなより所が

あるでしょうか。もっと言えば、より所などというどこか抽象的で無機質なものではなく、この私の現実を真実受け止めてくれて、その息づかいが伝わってくるような誰か。そのような誰かが私たちにはたしているかどうか。私たちが欲しいのは、99%の深みではありません。100%の徹底的な深みにおいて人生の不条理や苦悩を理解し、この私の内なる闇を知って、そして それらを自分のものとして受け止めてくれる真実な相手です。そんな誰かを、私たちはどこに求めるのでしょうか。

今月、私たちは前回に引き続き、「ヨハネによる福音書」の1章1節から18節をテキストとして、聖書の語りかけを聴こうとしています。今回はその2回目となります。そして、ヨハネの福音書はこの冒頭の箇所「栄光」について語ります。14節、「言ことばは肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた」と。

「栄光」とは、ヨハネが好んで使う表現です。言い換えれば、ヨハネは イエス・キリストの生涯を語る時、栄光という問題をそれだけ重要なものと考えていたと言えるでしょう。ところが、です。興味津々、読み進んでいくうちに、ある記事のないことに気づかされます。主イエスの栄光をドラマチックに描いた有名な箇所、他の福音書がそろって記しているものです。「ルカによる福音書」から引用すると、

・・・イエスは、ペトロ、ヨハネ、およびヤコブを連れて、祈るために山に登られた。祈っておられるうちに、イエスの顔の様子が変わり、服は真っ白に輝いた。見ると、二人の人がイエスと語り合っていた。モーセとエリヤである。二人は栄光に包まれて現れ、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について話していた。ペトロと仲間は、ひどく眠かったが、じっとこらえていると、栄光に輝くイエスと、そばに立っている二人の人が見えた。その二人が・・・(ルカ 9:28~36)

と続く箇所で、いわゆる「山上の変容」と呼ばれるところです。ある意味で、イエス・キリストの栄光を最も劇的に、最も鮮やかに描いた箇所と言えるでしょう。栄光にこだわるヨハネです。ヨハネにあつて他の福音書にないのなら分かります。でも、その逆なのです。ヨハネはなぜ、「山上の変容」を記さなかったのか。いかにも不思議に思われます。事を知っていてルカによれば、山上に伴った3人の中に 弟子のヨハネの名も見られます一、そのうえでなお 意図して落としたのか。それとも、ヨハネ福音書をまとめた者(たち)は そもそも、山上の出来事について知らなかったのか。そうした福音書編纂上の問題もあるとはいえ、そのどちらにしても、事の記述はありません。が 実は、そのいわゆる栄光の出来事が見当たらないという まさにそのことのなかに、ヨハネが何より伝えたかったメッセージが隠されているようにも思われます。実際、「栄光」についての捉え方が、ヨハネ福音書においては 通常のそれとは違っていることが分かります。

かぎは「栄光」の言葉に先立つ一文、わけでも その終わりの一語にあります。「言は肉となっ

わたしの心に・・・

て、わたしたちの間に宿られた」の最後の一語、「宿られた (<sup>エスケーノーセン</sup>ἐσκήνωσεν<<sup>スケーノオー</sup>σκηνώω)」に  
です。この言葉は、新約聖書の原語のギリシア語で元来、「テントを張る」ことを意味しました。聖  
書的な言い方をすれば、「天幕を張る」「幕屋に住む」などとなります。1章の14節はヨハネによる福  
音書の核心、中心の中心と言えるでしょう。つまり、ヨハネはそこで、「言が肉となって、すな  
わち独り子なる神が肉体をとり、イエス・キリストとなって、私たちの間に天幕を張ら  
れた。私たちのただ中で、幕屋に住まわれた」と語るのです。ならば、それはいったい、ど  
ういう意味なのか。そこが知りたいところです。

注解書の中には、14節のこの部分を次のように説明するものがあります。

福音書記者は慎重に、永遠のロゴス〔すなわち、イエス〕が宿るということを言う。  
ロゴスにとって 地上の生は短い挿話にすぎず、過渡的な状態にすぎないのである。家  
と違って 天幕は一時的にしか住まないものなのだから……。人と成り 地上に生きた  
ということがいかに重要であるにしても、ロゴスの地上以前・以後の存在と比べれば、  
地上の時は間奏曲にすぎない。

また、次のように語る説教者もいます。

天幕とは、この世に根を下ろした固定した家ではなく、いつでも、どこにでも移動可  
能な仮りの宿です。・・・イエスはこの世の組織や制度、文明の進歩、そのようなこと  
には関心を持たれなかったのです。イエスは、この世から自由にされた、一個の放浪の  
巡回伝道者でした。・・・イエスは、この世を旅人、宿り人として自由に生きた人でし  
た。「天幕を張る」とは、そういうことを意味しているのではないのでしょうか。

しかし、どこかしっくりこないのはこの私だけでしょうか。イエス・キリストにとって、その地上  
の生涯は「過渡的」「一時的」な「間奏曲」にしかすぎず、単なる「仮りの宿」でのことだったのか。  
「この世の組織や制度」はどうでもよかったのか。そして、その一生は単に、「旅人」や「宿り人」  
のそれでしかなかったのか。そんな思いが拭えませんが、要するに、主イエスにとって、地上の生涯  
はその程度の軽いものでしかなかったのか、という疑問です。問題は しかし、テントは持ち運び用  
の設備で、あまり重要なものではないという、現代の私たちのそうしたイメージから来ているように  
思われます。そうではなく、事は福音書の書かれた当時のユダヤ社会で天幕がどんな意味合いを持っ  
ていたのか、幕屋がどのような意味を持っていたのかということではないのでしょうか。そこから見て  
いかねばならないように思います。

ユダヤ人にとって、「テント」とは その最も重要な意味において、旧約聖書が語る特別な幕屋、幕  
屋の中の幕屋を意味しました。彼らの祖先はかつて、奴隷のエジプトを脱出し、乳と蜜の流れる地を  
目指して、荒れ野を放浪しました。幕屋の中の幕屋とは、その荒れ野で神と見え、神に礼拝を捧げ

た場所です。エジプトからの脱出を記した旧約聖書の出エジプト記は、こう記しています。「モーセは一つの天幕を取って、宿営の外の、宿営から遠く離れた所に張り、それを臨在の幕屋と名付けた。主に伺いを立てる者はだれでも、宿営の外にある臨在の幕屋に行くのであった」(出エジプト 33:7)。神がその場に臨まれ、人々とお会いくださる特別な幕屋です。ユダヤ人にとって、それは聖なる特別な場所でした。神が見えてくださるからです。しかも、事はこれにとどまりません。臨在の幕屋が建てられ、礼拝の準備が整ったとき、一つの出来事が起きます。出エジプト記は記します。「雲は臨在の幕屋を覆い、主の栄光が幕屋に満ちた。モーセは臨在の幕屋に入ることができなかつた。雲がその上にとどまり、主の栄光が幕屋に満ちていたからである」(出エジプト 40:34~35)。こうした出来事はその後も続きます。つまり、ユダヤ人にとって「テント」とは、この「臨在の幕屋」を思い起こさせ、そこに満ちる「主の栄光」を思い起こさせるものだったのです。そして、それはまた、栄光に満ちる神が人々の間に住まわれることを象徴するものでもありました。

これを知るとき、「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」と語るヨハネのその言葉には、まさしく深く重い神の真実が隠されていることが見えてくるのではないのでしょうか。すなわち、イエス・キリストの生涯そのものが、私たちが見えざる神と見え、その栄光を目にする臨在の幕屋にほかならないということです。だからこそ、ヨハネはすぐさま、「わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって・・・」と言葉を続けています。モーセ以来の歴史の幕屋は、どれも不完全な、仮の幕屋でしかなかった。肉となられ、私たちに宿られた独り子なる神 イエス・キリストこそ、神の栄光を余すところなく示す完全な幕屋である。これこそが、ヨハネの言わんとしたことでした。

とはいうものの、福音書の著者は いったい、主イエスのどこに栄光を見たのでしょうか。実際、山上の変容を除けば、イエス・キリストの生涯はむしろ、華やかさや権力からはかけ離れた生涯でした。公に宣教を開始する前は、大工として、<sup>のこぎり</sup> 鋸 や <sup>かなづち</sup> 金槌 で汗まみれの毎日でした。宣教を始めた後も、同じです。神について語りはしました。しかし、場所は政治の中心から遠く離れた、ローマ帝国の属領ユダヤ。しかも、直接触れ合った人々の数は、どう多く見積もっても限られたものでしかありません。加えて、そのほとんどは中心のエルサレムではなく、<sup>かたいなか</sup> 片田舎の町々ででした。幾ばくかの<sup>かたいなか</sup> 人々に教えを説き、わずかばかりの弟子をもとに集め、時に奇跡を行なった。言ってみれば、主イエスの生涯とはそれだけのものでした。そして 最後には、人々から <sup>ばせい</sup> 罵声を浴びせられ、弟子たちにも捨てられて、結局、十字架上で処刑される。それが、イエス・キリストの生涯でした。いったい、そのどこに栄光があるというのでしょうか。

とりわけ、生涯の最期となった十字架の死はそうでした。栄光と呼ぶにはあまりに惨めなものでした。事実、当時の統治国・ローマ帝国では、十字架の死は最も惨めな屈辱の死と考えられていました。奴隷や身分の低い者たちに行なわれた刑であり、ローマの市民権を持たない者たちに執行された刑でした。市民権を持つ者たちには 原則として <sup>つるぎ</sup> 剣 による <sup>ざんしゅ</sup> 斬首の刑などを行ない、十字架刑は執行しなかつたと言われます。死に際しても、人間としての最低限の尊厳を保障するためでした。が、十字架

刑は受刑者を縄や釘で十字架につけ、餓死するまでそのまま放置するのが常で、時に足を折り、死を速めることもなされたといえます。その死は、激痛と苦悶に満ちたものでした。十字架刑を称し、「拷問刑の芸術的極致」と呼んだ者さえいます。このように、十字架の死は呪いの死であり、辱めの死以外の何ものでもありませんでした。それは、栄光とは無縁のものでした。

にもかかわらず、ヨハネは、十字架上で死んだイエス・キリストの生涯にこそ栄光を見る、と言うのです。実際、ヨハネは、主イエスの栄光に触れるとき、その死について語ることを忘れません。捕らわれを前にしたイエス・キリストの言葉として、ヨハネはこう記しています。「イエスはこうお答えになった。『人の子が栄光を受ける時が来た。はっきり言うておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ』」(ヨハネ 12:23~24)。主イエスの目は、私たちの目とは違っていました。イギリスの聖書学者にバークレーという学者がいますが、そのバークレーも次のように語っています。

イエスは彼らが考えるような意味で、栄光を受けるといわれたのではない。彼らが栄光を受けるといふ言葉によって意味したのは、征服された地上の諸王国が勝利者の足下にひれ伏すことであった。だが、イエスは栄光を受けるといふ言葉によって、十字架につけられることを意味していたのだ。

ヨハネにとって、イエス・キリストの栄光とはまさに、私たちのために十字架で死ぬことだったのです。

巷には、安っぽい気休めの言葉が溢れています。苦悩の深さを分かりもせず、同情の言葉をかける人々がいます。心の深みに届かない、形ばかりの浮ついた言葉です。一見、奇麗で優等生の言葉ながら、自分に面倒が及ぶ危ないことは決して言わない、決してしない。限度をわきまえたおつき合いの言葉が溢れています。自分は痛まぬよう自分を守りながら、しかし人にはよく思われたい。そこには、我が身を削る、体重の懸かった真実がありません。けれども、イエス・キリストの生涯は、私たちの痛みを自らの痛みとし、私たちの苦しみを自らの苦しみとする生涯でした。私たちが痛み苦しむ、そのところに共にいるためです。それは、最も貧しいところ、最も低いところで私たちのすべてを味わい、私たちのすべてを身に受けるものでした。十字架はまさに、その極みにほかなりません。

神と等しいお方が人となり、そのすべてを身に負われたというメッセージは たしかに、そう容易に受け入れられるものではないだろうと思います。実際、当時のキリスト教会の中にもこれを認めない人々がいたことは、前回 短く触れました。しかしながら、ヨハネの言葉はあくまで一貫しています。独り子なる神がイエス・キリストとして、事実 人となり、この私たちと同じように食べ、飲み、歩き、飢え、疲れ、痛み、そして苦しみました。主イエスの生き様は演技や見せかけではなく、真実そのものにほかならない。私たちのすべてを、身をもって味わわれた。私たちのすべてを身に負われた。

ヨハネはそう語って、譲りません。神の真実がそこに懸かっているからです。

十字架の死もまた、イエス・キリストが現実に苦悩された<sup>まが</sup> 紛いのない出来事でした。人の力ではどうにも解決しえない 私たちの救いがたい現実に向けられた、己が身を裂く行為<sup>おの</sup>でした。私たち人間のその最も<sup>むご</sup> 酷い悲しみまで、主イエスは確かに 御自身の身で味わってくださった。しかも、これ以上の悲惨はないとも言える、独りぼっちなただ独りでそれを負って味わってくださった。それが十字架というものだったのではないのでしょうか。そして、実はそこにこそ、主イエスが全く人間であり、しかもまた神と等しいお方でもあられたという、信仰のその真実が隠されていることを繰り返し憶えさせられています。最も貧しく、最も低いところで私たちのすべてを味わい、そのすべてを身に負ってくださった方。イエス・キリストとは、そういうお方でした。それは、主イエスの死を頂かねばならないほど、それほどまでに 私たち人間の闇と苦悩が深いということではないか。そのように思わされてもいます。主イエスはこうして、「成し遂げられた」(ヨハネ 19:30) と語って、息を引き取られたのでした。

私たちの現実には矛盾と苦悩で満ちています。そんな現実の中でそれぞれに荷を負い、一度きりの人生を生きています。私たちははたして、この世の行きづまりを独りで打ち破れるのでしょうか。この世の闇を、そして自分自身の闇を独りで打ち破れるのでしょうか。私たちははたして、自分独りで<sup>まこと</sup> 真の人生を生きられるか。自分独りで本物のいのちを生きられるか。そして ついには、自分自身をその闇の深みから救い出せるのでしょうか。私たちに必要なのは、もう一つの現実に気づくことではないか。すなわち、私たち人間の内からはこの行きづまりと闇とを突き破る真の光は射してこないという、その現実に気づくことではないかと思わされています。

芥川龍之介の「蜘蛛の糸」という童話を御存じかと思います。お釈迦様が<sup>しゃか</sup> 極楽の<sup>はす</sup> 蓮の池のほとりにたたずんで 池の中を覗かれると、底の地獄のほうで 罪人たちが<sup>ざいにん</sup> 蠢いて<sup>うごめ</sup>います。そのうちの一人、カンダタの生前の善行を思い出したお釈迦様は蜘蛛の糸を垂らし、彼に救いの手を伸べられたという物語です。ポピュラーな童話ですが、ここには、芥川が理解した 仏教のある種の救いの捉え方が象徴的に表現されていると言えるのではないのでしょうか。それは、人は慈しみの対象とはいえ、しかし 救われるためには自分で蜘蛛の糸をつかみ、自分で上<sup>のぼ</sup>りに上り、自分で水の上に出なければならぬということです。つまり、悟りとは本質的にそういうもので、救われるためには それを自分で得なければならないというのです。そして しばしば、ここにキリストによる救いとの本質的な違いがあるとされます。

(もちろん、芥川の理解に従えばですが) お釈迦様は、自分では池の底に<sup>お</sup> 下りてこられません。自分から池の底まで下り、自ら<sup>ざいにん</sup> 罪人の手を取ることはされません。けれども、聖書が指摘するのは、人は自分の力によっては池の上まで<sup>のぼ</sup> 上れないという現実です。聖書はそれを、人の内なる闇のためであり、人の内に潜む罪性のためであると言います。実際、「蜘蛛の糸」もまた、醜い人間の本质を描いています。他の罪人たちも糸を見つけ、我も我もと上ってきます。そのとき、先に上っていたカンダタが叫びます。「こら・・・。この蜘蛛の糸は<sup>おれ</sup> 己のものだぞ。お前たちはいったい誰に<sup>き</sup> 尋いて、のぼって来た。おりろ。おりろ」。そうして結局、そう叫んだカンダタの手元で糸

がプツリと切れ、皆、闇の底へと真っ逆さまに落ちていったのでした。私たち人間に巣くう 自分本位の醜い本質を言い当ててはいないでしょうか。自らの内を正直にごまかさずに見詰めるとき 否応なく見せつけられる、私たちの偽らざる姿です。

だからこそ、ヨハネは言います。「人は 律法によっては救われない。行ないによっては救われない。自分の力によっては救われない。心から真実 良い行ないをすることなど、どこまでいってもできないからである。人は、恵みによってしか救われない。私たちの足りなさを救<sup>ゆる</sup>し、共に歩んでくださるイエス・キリストの恵みによってしか救われない。ここにこそ、全き真理がある。私が語るのはこの新しい信仰についてである」。そう語るのです。17節に「律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れた」とありますが、それはこのことを言っています。律法とは十戒<sup>じっかい</sup>に代表される戒めのことで、厳密にはそれらを記した旧約聖書の初めの5書、「創世記」「出エジプト記」「レビ記」「民数記」「申命記」を意味しています。モーセの書とされる5書です。ヨハネが「律法はモーセを通して与えられたが・・・」と語るのは、このためです。しかし、ヨハネはその律法について、「がしかし・・・」と語ります。「が しかし、そのような律法によっては、私たちはもはや救われない。それは完全な真理ではなく、私たちをもはや救ってはくれない。私たちが真実救ってくれるのは恵みを下さるイエス・キリスト そのお方であり、その主イエスの示してくださった全き真理である。私たちが招かれているのは、この新しい信仰になのだ」と、そう語るのです。

イエス・キリストは、御自分のほうから進んで、池の底まで下<sup>お</sup>りてきてくださいました。自ら進んで池の底まで下り、私たちの手を取ってくださいました。主イエスは単に教えを垂れたのではなく、御自分のほうから私たちのところに来て、そのいのちを注ぎ出してくださいました。受けるに値しない、受ける資格のない者に与えられるものを「恵み」と呼びます。自分の力では得られない、自分の立派さでは手にしえないものを与えられることを「恵み」と呼びます。「恵み」は、キリスト教の信仰を表わす中心的な言葉の一つです。ヨハネはその言葉を、冒頭だけで4度も繰り返しています。神と等しいお方が人となり、御自分のほうから私たちのもとに来てくださった。これ以上の恵みはないからです。ここにこそ、自らを<sup>ささ</sup>げ<sup>さ</sup>る愛があるからです。

この 律法の救いのなさ<sup>さ</sup>とキリストの福音の恵みについて、ボーレンという先生が講演の中でおもしろい<sup>た</sup>譬<sup>ばなし</sup>え話を語っておられました。世界的に著名な、ドイツの説教学の先生です。

私が子どもであったとき・・・バーゼル宣教協会・・・が作った絵を見たことがあります。立派な人が鏡に見入っている。しかし、鏡の中から彼を見詰めているのはとんでもない無頼漢<sup>ぶらいかん</sup>である。そんな絵です。これは律法の鏡です。福音の鏡においては、無頼漢が鏡に見入り、そこに立派な紳士を、豊かに与えられている男を見るのです。

本当に深い真理は、一見、愚かに見えるのではないのでしょうか。物事の本質を射抜く真実は、一見、

馬鹿げて見えるのではないのでしょうか。「大賢は愚なるが如し」という格言があります。「大賢は愚に似たり」とも「大知は愚の如し」とも言われたりします。元々は土佐藩士の言葉と言われますが、本当に賢い人は一見 愚かな者のように見えるという、物事の真理を語ったものです。イエス・キリストはまさにそのようなお方であり、その生涯はまさに、そのような真理で満ちていました。訳知り顔に自らの賢さを誇る者にはその生き様は愚かに映り、そこに秘められた神の真実は見えてこないことでしょう。上辺の華やかさに栄光を求める者にはその姿は惨めに映り、そこにほとぼる神の愛は見えません。ですから、ヨハネは記すのです。5節、10節、「暗闇は光を理解しなかった」「世は言を認めなかった」。上辺の知識と栄光とに心奪われるこの世は、愚かさの内にこそあるかけがえのない真実を見ることができません。

初めに戻りましょう。「栄光」とは、何でしょうか。それは いったい、どこにあるのでしょうか。

前回、遠藤周作さんの最後の長編小説『深い河』について触れましたが、その中で、神父崩れの大江が次のように語ります。「玉ねぎ」とは、イエス・キリストのことです。

この世の中心は愛で、玉ねぎは長い歴史のなかで それだけをぼくたち人間に示したのだと思っています。現代の世界のなかで、最も欠如しているのは愛であり、誰もが信じないのが愛であり、せせら笑われているのが愛であるから、このぼくぐらいはせめて玉ねぎのあとを愚直について行きたいのです。

その愛のために具体的に生き苦しみ、愛を見せてくれた玉ねぎの一生への信頼。それは時間がたつにつれ、ぼくのなかで強まっていくような気がします。

イエス・キリストの真実とは まさに、愛することの真実にほかならないのではないのでしょうか。そして、その栄光もまた、愛することの栄光にほかならないように思われます。それは すなわち、死に至るまで御自分を献げ抜いてくださった、その愛の栄光です。本物の栄光は、自分を売り込むことをしません。華やかさで飾ることをしません。居丈高な態度で脅すことをしません。真実の栄光は、自ら進んで貧しくなり、身を低くして仕えます。人々は病んでいました。痛んでいました。苦しんでいました。主イエスはその病を、痛みを、苦しみを癒やされました。そして、救いを求める人々に、身を挺して 御自身を差し出されました。その生涯は、真のいのちを求めて渴くすべての人に捧げられた生涯でした。それは、「栄光は仕えることのなかにこそ、献げることのなかにこそある」と語るものではないのでしょうか。劇的で華やかな栄光の記事「山上の変容」がヨハネの福音書に見当たらないということ。それは、一いかなる経緯でそうなったのかは別にせよ、いずれにしてもヨハネ福音書が「山上の変容」とは別の目で 主イエスの栄光を見、これを理解したことを物語るものと言えるでしょう。「誤解をしてほしくない。本当の栄光とは、見かけの華やかさやこの世の権力の大きさとは無縁なのだ。それは、自分を献げて生きることのなかにこそあるのだから」。ヨハネはそう語りたかったにちがひありません。

フォン・ラートというドイツの聖書学者が言っています。「神の愚かさがこの世の知恵を砕い



た」と。神は愚かにして、予想だにしない愚行に出られました。私たちのために、その独り子イエス・キリストを死に渡されたのです。主イエスはこうして、私たちのために己が身を裂いてくださいました。自ら体を張って 浅薄なこの世の知恵を砕き、その愛の真実に目を開かせるためでした。そのイエス・キリストが今なお生きて、この私たちに伴い立ってくださっている。主イエスを再びいのちへと引き上げられたその父なる神が、今このときも、そしてまたこれから先も、この私たちと共にいてくださる。教会とは、そのことを信じ、そこで力を与えられて、イエス・キリストについていく者たちの群れにほかなりません。

『深い河』は、その終盤で、インドの人々に交じり、死にゆく者たちを背負ってガンジス川に運ぶ大津の姿を描いています。それは、彼の愚かさの終着点にほかなりません。しかし なぜ、大津はそのような愚かさ生きるのか。遠藤さんは大津に、こう語らせます。

この背にどれだけの人間が、どれだけの人間の<sup>かな</sup>哀しみが、おぶさってガンジス河に運ばれたろう。大津はよごれた布で汗を拭き、息を整えた。その人間たちがどんな過去を持っているか、行きずりの<sup>ゆ</sup>縁しかない大津は知らない。知っているのは、彼等がいずれもこの国ではアウト・カーストで、見捨てられた層の人間たちだ、ということだけだ。

<sup>ひ</sup>陽がどのくらいのぼったかは首や背にあたる陽光の加減でよくわかる。

(あなたは)と大津は祈った。(背に十字架を負い 死の丘をのぼった。その<sup>まね</sup>真似を今やっています) 火葬場のあるマニカルニカ・ガートでは既にひとすじの煙がたちのぼっている。(あなたは、背に人々の哀しみを背負い、死の丘までのぼった。その真似を今やっています)

イエス・キリストは私たちの痛みと悲しみを背負って、その背に十字架を負われました。私たちの消しがたい闇を背負って、その背に十字架を担われました。大津は今、その主イエスの真似をしている。主イエスと一緒に、主イエスと隣り合って、人々の哀しみの十字架を背負い、その遺体をガンジスの火葬場へと運んでいます。

私たちもまた、イエス・キリストに十字架を負っていただいている者として、またその主イエスについていく者として、隣り人の重荷を負う者になりたい。互いに仕え合い、支え合う者になりたいと思います。ヨハネは、そこにこそ「真実の栄光」があると語ります。私たちもまた、そうしたところに栄光を見る者になりたいと思います。「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」(ヨハネ 15:13)。主イエスはそう言われ、その言葉のとおり、この私たちのために御自身の命を捨ててくださいました。その爪の<sup>あか</sup>垢ほどのかけらでも、この自分の一部にすることができたら、と思わされます。いや、そうではない。そうではなくて、それは自分にはできないことだから、だからわずかなりとも、そういう心を与えてほしい。そう祈らされています。教会に集うみんながそうした同じ祈りを共にできたら、私たちはそこに、生ける主イエスの<sup>みすがた</sup>御姿を見ること

ができるように思います。

一年で一番暗い時、  
町で一番みすぼらしい場所。  
冷えきって、不安さえ漂う。  
ふたりのほか、誰もいない。  
そんな現実には、何を期待できるというのか？  
学びきれないほどの光を、  
蓄えきれないほどの豊かさを、  
受け止めきれないほどの愛を、  
計りきれないほどの平安を期待しよう。  
ひとりの子どもが生まれたのだ。

イエス・キリストの恵みを知った詩人の、クリスマスの詩<sup>うた</sup>です。

「貧しいようであるが、多くの人を富ませ、何も持たないようであるが、すべての物を持っている」(Ⅱコリント 6:10。口語訳)。イエス・キリストとはまさに、そのようなお方でした。そして、「わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けた」(16) のです。

〔祈り〕

恵みの神様。

世の常識<sup>よど</sup>で澱んだ目を澄ませ、事を正しく見極める目を開いてください。真<sup>まこと</sup>のいのちのあり処<sup>か</sup>を見抜く目を与えてください。今いるところから一步 踏み出し、御手<sup>みて</sup>の中で自分を変える勇気を与えてください。惰性に沈むことなく、日々 新たな自分になりたいと思います。

生ける御子<sup>みこ</sup>イエス・キリストにおいて、あなたが今もこの先も私たちに伴い立ってくださるとの その約束を信じます。約束に信頼し、安心して、進むべき道<sup>みち</sup>を尋ね求めてまいります。強く大きな御手<sup>て</sup>をもって、行く道<sup>みち</sup>をどうか 支え導いてください。

あなたの内なる恵みを感謝し、主の御名によって願い、お祈りいたします。

アーメン